慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	花と稽古の論理 : 世阿弥の世界
Sub Title	The logic of the noh-flower
Author	中山, 一義(Makayama, Kazuyoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1972
Jtitle	哲學 No.60 (1972. 12) ,p.149- 173
Abstract	The present thesis has two questions. The one is 'What is the Noh-flower?' and the other is 'What to do to know it?' The answer of the first question is the analogy, or psychological and logical resemblance between the real- and the noh-flower. The psychological proposition, here, is that the flower, novelty and interest are all the same, and the logical ones are that both the real- and the Noh-flower are transient, and are not permanent existence. The answer of the second question is the methodology of knowing the Noh-flower. There are two problems here. The first is that what is it to know the Noh-flower and then the second is what to do to know it. To know the Noh-flower is to know oneself and to become the flower itself, because the actor is born with the potentiality to become the flower. This is the answer to the first question. To exercise heavily and earnestly, according to the "catechism of the Noh-flower" for meditation and practice, there are introduced ten catechetic questions and answers of the Noh-flower. The above mentioned articles are what I have been reading and learning in Zeami's 'Kwadensho' for forty-five years since 1929.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000060-0149

花と稽古の論理

世阿弥の世界

中　山　一　義

序

去る七月八日，市が谷の私学会館で石門心学会の総会が開かれました．わたしは特別講演を頼まれ，世阿弥の『花伝書』について話をし，その中で，世阿弥の花の思想に関する私流の解釈を申し述べましたところ，二三の方から，「君の解釈はおもしろい．あの桜の木の下で思いついたいきさつを，もっと詳しく聞かせてほしい」という注文がありました．そこで，この夏休の余暇に想を練り，九月に入って書き出そうとしたところ，腸閉塞という病気にかかり，二時間近い大手術をしましたが，経過もよく，十日ほど前に退院して，目下自宅で保養につとめています．保養のかたわら，中断した想を再び練り直し，書きはじめました．以下の文章は，上記の注文に応えたものであります．

強い願望を持って思いつめると，それが夢の中で実現される，という話をよく聞きます．わたしはそういう例を二つほど知っています．一つはチャールズ・ラム，もう一つは明恵上人の話ですが，ただ，実現の仕方には，それぞれ個性があるようです．

四十六年も前のこと，大学予科二年の時，英文学の戸川秋骨先生にラムの『エリヤ随筆』を読んでいただきました．その中に，「夢のこどもたち」Dream Children という一章があって，副題に，a Reverie とありました．わたしはこの「夢想」という意味の単語を，その時はじめて知りましたが，それ以来忘れたことはありません．よほど印象が強かったとみえま

す．内容はそれ以上に若いわたしのこころをとらえました．ラムは心のやさしい人で，精神病の姉の看護のために，アリスという少女への愛をあきらめて，一生独り身で過しました．アリスはバートラムという男に嫁入って，ジョンとアリスという男女二人の子をもちました．ドリーム・チルドレンという夢想の中には，この男女二人の子供たちが，ラムと昔の愛人アリスとの間に生れた子として出てきます．それは，哀しいような，なつかしいような，とてもうつくしいあたたかい話です．わたしは大好きで，何度も何度も読み返し，とくに好きな個所は暗誦ができるほどでした．そこで，たくさん書込みのある昔のテキストを探しだしました．さわりの所を引用してみます．

> Then I told how for seven long years, in hope sometimes, sometimes in despair, yet persisting ever, I courted the fair Alice W—n; and, as much as children could understand, I explained to them what coyness, and difficulty, and denial meant in maidens—when suddenly, turning to Alice, the soul of the first Alice looked out at her eyes with such a reality of representment, that I became in doubt which of them stood before me, or whose that bright hair was; and while I stood gazing, both the children gradually grew fainter to my view, receding, and still receding till nothing at last but two mournful features were seen in the uttermost distance, which, without speech, strangely impressed upon me the effects of speech; "We are not of Alice, nor of thee, nor are we children at all. The children of Alice call Bartrum father. We are nothing; less than nothing, and dreams. ....."

子どもたちの幻影が，だんだん遠のいて，「わたしたちは，アリスの子でも，あなたの子でもありません．アリスの子たちはバートラムを父と呼んでます．わたしたちは無です．否，無でもなく，夢にすぎません」という声の薄れて行くあたりを読んで，わたしは願望というものが，こんなにも

美しく，あたたかく，しかも，哀しい文章を生むことを知って，人生を見直しました．今でも，この文章を読むと，あのころのこころの鼓動をおもいだします．

もう一つの，鎌倉初期の名僧，栂尾(とがのお)の明恵上人の話というのは，釈尊への異常なまでの思慕からかもし出される明恵に関する数々の興味ある説話です．釈尊への思慕は再度にわたって渡天を企てさせましたが，いずれも実現しませんでした．これは世阿弥作の謡曲「春日龍神」になって残っています．明恵は夢の名人ともいうべきひとで，現実には，時をへだてて，釈尊に会えませんから，夢の中で会うその記録が，「夢の記」として残っています．また，釈尊ゆかりの地印度に行けませんでしたので，建永元年(1206) 院宣が下って，栂尾を賜わると，明恵は，ここを華厳興隆の地と定め，高山寺の諸施設を．釈尊の遺跡に擬(なぞら)えて，山を楞伽山，草菴を練若台，若宮殿，羅婆坊と名付けたそうですから，明恵の夢は，白日夢といって，しりぞけるには，あまりにも現実味をもっていました．

ラムや明恵の夢とは比べものになりませんが，わたしも，二十年ほど前に，奇妙な夢の経験をもちました．

わたしが『花伝書』の「花の思想」のとりこになった切っかけは，四十六年も前のことになります．昭和二年，岩波文庫が創刊され，その中の一冊，野上豊一郎校訂の『花伝書』を手にした時からであります．俗に「憑かれる」ということを申しますが，世阿弥の花の思想に憑かれたのです．憑かれた人たちのことを，英語で the possessed ということは，ドストエフスキーの『悪霊』という長篇小説の英訳本で知りましたが，神霊やアイデアに魂を占領されてしまった人たちをいうらしい．わたしもこころの大半を「花の思想」に占拠されてしまったようです．

昭和十五年ころ，西田幾多郎の論文集『働くものから見るものへ』の序文の一節，

> 形相を有となし，形成を善となす泰西文化の絢爛たる発展には，尚ぶべきもの，学ぶべきものの許多なるは云ふまでもないが，幾千年来我等の祖先が孚み来った東洋文化の根底には，形なきものの形を見，声なきものの声を聞くと云った様なものが潜んで居るのではなからうか．我々の心は此の如きものを求めて已まない．私はかかる要求に哲学的根拠を与えて見たいと思ふのである．

というのを読んで，わたしは「花の思想」の中に，「形なきものの形を見，声なきものの声を聞」いてみよう，と考えるようになりました．

それから十年，終戦をはさんで，前半の五年間はもっぱら，たくさんの古典の中に，この問題を解く鍵を探しもとめましたが，目的を果たしませんでした．後の五年間は，『花伝書』そのものの中に求めました．そして，ようやく，手がかりらしいものを見つけ出したような気になりました．ちょうど，そんな気持になりかけたとき，わたしは夢の中で，世阿弥に会う機会をもちました．

昭和二十五年の初夏のある午下り，病気上りのわたしは，庭の一遇にあるひとかかえにあまる桜の木の下に，籐椅子を出して，これに凭りながら，『花伝書』を読んでいました．よく晴れた暖かい日でした．わたしはいつの間にか，まどろんだらしい．夢の中で，わたしは世阿弥と対座していました．背景は金閣寺の中の一室でした．昭和十八年学会で京都へ行ったとき，立ち寄った記憶が鮮明（あざやか）だったせいかもしれません．夢の中のわたしは，さっきからしきりに世阿弥に話しかけています．話し声はきこえませんが，夢の外のわたしには，何を云っているのか，不思議なことに，わかるらしい．世阿弥は終始だまって，ひとこともしゃべりませんが，そのまなざしや顔の表情から，夢の中のわたしの云うことをいちいち認めているらしい．そのうちに，夢の外のわたしが，まちくたびれて，いつまで話をつづけているのかな，と思ったとたん，その時まで，黙然と動かなかった世阿弥の表情がくずれて，ニッコリ微笑（ほほえ）みました．夢の外のわたしが，ああ，これは，いつかどこかで見た或る巨匠の描いた拈華微笑の図だな，と思った瞬間，夢が醒めました．

桜樹の葉をもれてくる初夏の陽差しは，もとの通り，やわらかくわたしをつつんでいました．

花の比論（アナロジー）

夢からさめたわたしは，頭の中が空洞のようで，しばらくは，なにも感じず，ボンヤリしていました．どれほどそうしていたかわかりませんが，やがて，いつの間にか深い冥想の世界にはいりこんでゆきました．

さきほどの夢を思いうかべていました．夢の中の自分が，世阿弥に問いただしていたことを，思いだしていました．夢の外の自分には，それはわかっていたからです．それは，花は仏教で説く「縁起」ではないか，という質問でした．世阿弥はひと言も答えませんでしたが，眼つきや表情は，それを認めているようで，最後に，微笑をもって肯定しました．そうして，夢の外の自分がそう感じた時に，夢が終ったのでした．

まことに奇妙な夢でありました．「花は縁起である」という解釈は，すでに一年ほど前に，わたしがたどりついていたものでした．終戦後五年間，『花伝書』を読み，その中からつかみだしたものでしたが，なにごとも中途半端が好きで，結論をいそがぬ怠惰な性質のわたしは，この解釈の仕上げを放置して，自分自身にさえ匿しているような風でありました．しかし，わたしの心のどこかに，この考えをまとめ上げてみたい，という強い願いがあったのもたしかです．それがこんな奇妙な夢になったのかとも思いますし，それは，その時わたしが病気上りだったせいかもしれません．

わたしは，冥想の世界にだんだんのめりこんでゆきました．

『花伝書』は，見れば見るほど，整然とした仕組をもっています．七篇からできていて，父観阿弥の遺訓にもとづいたというはなしですが，父が五十二で死んだ時，世阿弥は二十二で，書いたのは，十数年後の，四十前後ですから，親子の合作とみるのが，当っているようです．第一年来稽

古条々（生涯稽古・年令による七段階），第二物学（ものまね）条々（稽古の内容・物真似のいろいろ），第三問答条々（問答形式による稽古の問題点の解明・花を知るという学習目的），第四神儀云（能の歴史），第五奥儀讃歎云（能の効用），第六花修（謡曲の作り方），第七別紙口伝（基礎理論としての花の比論（アナロジー）と方法論として花の公案），以上がその構成ですが，非のうちどころのない仕組で，観世父子の天才に頭を下げるほかありませんが，ただ頭を下げるばかりでなく，わたしはむしろ天才たちに，このような構成をもったととのった理論の書を書かせたものが，背後にあったような気がして，それが何か，その正体を知りたく思い，調べてみました．

観世父子は，上古以来のかずかずの芸能のよいところ，謡いもの舞いものの長所を，とり揃えて，他派他流の天才たちの得手を参考にして，猿楽能という舞踊的要素の濃い歌劇（オペラ）風の物真似劇を大成しました．そうして，彼等は自分たちが創り上げた芸能を後の世に伝えたいという強い執念をいだきました．当然のことだと思います．しかし，どうしたら，自分たちの創りあげたものを後の世に伝えうるか，恐らく彼らは真剣に考えたことだろうと思います．そうして，彼らが到達したのが，これまた当然のことですが，理論の必要ということでした．理論はもと，自分の創ったものを，はっきりと自分でも自覚し，自分の考えをより確かなものにするとともに，さらに，他にも認めさせ，後世にも伝えようという願望から生れるものです．理論の裏付けのない考えは自分でも頼りないし，まして他人を納得させることはのぞめません．理論は客観化普遍化の要求を含んでいて，自分の創ったものの恒久を希うところに生れるものです．

そういうわけで，『花伝書』は，観世父子が猿楽能を後世に伝えるために考え出した「花の理論」を基にして，体系的に書きとめた書でありますが，ひるがえって中世の精神界をながめますと，宗教や学芸の世界に，理論が生れ，「道」という観念が起っています．中世以前にもすでにあったかもしれませんが，中世にはいると，一般的になりました．この現象は，

おそらく，わが国の精神界が，それぞれの領域で，大陸のそれから独立する気配を示し，それの必要を意識し，独立の意識の裏付けに理論を求めたのだ，と思います．観世父子もこの趨勢の外に特立しているものではありません．

ところで，能を理論で固めるには，それより前に，しっかりとした「論理」が手許になければなりません．世阿弥の天才は，ちゃんとそれに気付きまして，芸能論全体をささえる巨大な一枚岩のような論理を，基礎理論としてあらかじめ据えつけました．第七別紙口伝の劈頭にある理論がそれで，わたしはこれを「花の比論（アナロジー）」と名付けてみました．世阿弥が「花の咲くを見て，よろづに花と喩（たと）へ始めし理（ことわり）を辯（わきま）ふべし」といっているのが，それです．四季折々に時を得て咲く花の美をよろこぶ人びとの心理と，能のおもしろさをよろこぶひとのこころとが，同じ「縁起」の理（ことわり）に支配されていると見るのです．

縁起は仏が説いた真理で，仏の教えは縁起に尽きるとさえいわれています．一切は因（原因）縁（条件）によって生れ（果），因縁が亡くなれば，果もまた亡くなる，したがって，縁起するものは無常であって，不滅の実体とか，独立自存の固定したものなど存在するはずはない，というのが世界を支配する縁起の真理であると説くのです．要するに一切の現象の無常性と無我（自）性を説くわけです．

そういうわけで，四季折節の花々も，勿論例外ではありません．しかし，世阿弥の説のおもしろさは，縁起するからこそ，季節の花を見て人びとがよろこぶのだ，と主張するところにあります．「そもそも，花と云ふに，萬木千草において，四季（折節）に咲く物なれば，その時を得て珍しき故に，翫（もてあそ）ぶなり」と書いています．これは明らかに，原始仏教の四諦（四つの真理）のうちの苦諦・集諦の裏がえしです．すなわち，人生苦の原因は，一切は無常無我であるのに，人びとが縁起の理に無知なるが故に執着（煩悩）するからであると説く，これが苦諦と集諦ですが，世阿弥の花の

心理学では，この説を逆転して，いづれの花か散らで残るべき．散る故によりて，咲く比(ころ)あれば，珍しく，珍しいから面白いのだと主張するのです．わたしは「珍」と「面白」の心理学と呼んでいます．世阿弥は「花と，珍しきと，面白きと，これ三つは同じ心なり」という命題を提出しています．まさに世阿弥の天才の表出だと思います．

この心理学を思いついた時の世阿弥は冴えていました．しかし，その冴えも，心理的説明を超えて，花の論理的基礎付けに進むと，更に思想的深みを加えます．花の生態を，「現象」の面から見て，「いづれの花か散らで残るべき．散る故によりて，咲く比(ころ)あれば珍しきなり．能も住する（同じ姿に止まる）所なきを，花と知るべし」といい，次いで，「存在」の視点から見て，「ただ，花は，見る人の心に珍しきが花なり．（中略）されば，花とて別には（自性をもったものでは）なきものなり．物数を尽して，工夫を得て，珍しき感を心得るが花なり」と書いています．前者は花の無常性を，後者は花の無我(自)性を，説いているのです．わたしの悪い癖で，また，仏説にむすびつけますと，三法印（三つのスローガン，諸行無常・諸法無我・涅槃寂静）の中の前の二つに当るように，わたしには感じられるのです．

以上で，冥想第一日は終りました．

花を「知る」

それから数日後，同じようにあたたかい六月のある日曜日の午下りに，わたしはまた，桜の木の下に籐椅子をもち出して，それに凭りながら，思索にふけりました．

この日は，花を「知る」とはどういうことか，という問題について，これまでにたどりついた考えを，まとめられるだけまとめてみることにしました．

この問題は，頭の回転のにぶいわたしにとっては，なかなかしまつにわるいものでありました．世阿弥は第三問答条々の最後に，この問題をとり

あげています.「花の段」と呼ばれている注目すべき，大事な箇所で，わたしは別に「花問答」と名付けています．問答形式で書いてあるからです.

問．能に花を知る事，この条々を見るに，無上の第一なり．肝要なり．または不審なり．これ，いかにとして心得べきや.

答．この道の奥儀を極むる所なるべし．大事とも，秘事とも，ただ，この一道なり．先づ，大方，稽古・物学（ものまね）の条々に委しく見えたり．時分の花・声の花・幽玄の花，かやうの条々は人の目に見えたれども，その態（わざ）より出で来る花なれば，咲く花の如くなれば，また，やがて散る時分あり．されば，久しからねば，天下に名望少し．ただ，誠の花は，咲く道理も，散る道理も，心のままなるべし．されば，久しかるべし.

この道を知らん事，いかがすべき．もし，別紙の口伝にあるべきか．ただ，煩はしくは心得まじきなり．先づ，七歳より以来（このかた），年来稽古の条々，物まねの品々を，よくよく心中に当てて分ち覚えて，能を尽し，工夫を極めて後，花の失せぬ所をば知るべし．この物数を極むる心，即ち，花の種なるべし．されば，花を知らんと思はば，先づ，種を知るべし．花は心，種は態（わざ）なるべし．古人云はく，

心地含諸種　普雨悉皆萌
頓悟花情已　菩提果自成

（心地に諸の種を含む　普き雨悉く皆萌す
頓に花情を悟り已りぬれば　菩提の果自ら成ず）

以上が「花の段」の全文ですが，花を「知る」ことが，いかに大事で，しかもむつかしいかを述べた上で，三つの問題を提示しています．一つは「花を知るとはどういうことか」という問題，もう一つは「どうしたら花を知ることができるか」という問題です．第三の問題は，花の情を悟った後，結果として到達する境地の問題です.

前にも書きましたように，これはまことにやっかいな問題で，わたしは愚鈍のために，ずい分とながい時間をかけて，これに取り組みましたが，やっとどうやら目鼻がつきかけたところです．それも完全には遠いかもしれません．ああでもない，こうでもないと，苦労しました．夜分床の中で考えついたことも，朝方起きて思い直すと，くだらなかったりして，がっ

かりしたことなど，毎度のことでありました．それにしても，わたしは，この問題にしがみついて離しませんでした．その執念は自分ながらあきれるほどです．

「花の段」を何度くりかえし読んだかわかりません．読書百遍自ら意通ずといいますが，わたしの場合は百遍では通ぜず，数百遍ではじめていくらかわかりかけて来たところです．『花伝書』を手にして二十数年，この問題に直接とり組んで十年近く，それもようやくわかりかけたというわけです．これを読むのに，西田幾多郎の前記の文章が手がかりになりました．「形なきものの形を見，声なきものの声を聞く」というところです．花が縁起するものであり，無常であり無我であるならば，花はまさに形なきもの声なきものであるはずです．形もなく声もない花の，形を見たり声を聞くことは，どうしてできるのか，この問いに，「花の段」がはっきり答えているように思えてきたのが，ごく近ごろのことでした．それもぼんやりとわかりかけてきた，というのが真実です．わたしには，世阿弥が，「花の段」に，態(わざ)から出で来る花と，心から出でくる花と，二つの花のあることを示して，この二つを辯別せよ，といっている真意が，長い間わかりませんでしたし，「花は心，種は態(わざ)」という命題も，生意気にもわかったような気でいました．そういうころの自分が，何となく，自分でも頼りなく，自信のなかったことを思いだして，恥しくおもいます．しかし，それでは，現在のお前は自信があるのか，ときかれると，いまでもたじろがずにいられないのが，正直なところです．

とにかく，現在の理解のほどを，すなおに書いてみます．態から出で来る花は，若さや生れついた声や姿形から来るもの，または，数多くの稽古で錬えた所謂達者な芸から来るもので，それだけで，そのままにしておけば，いつかは散ることはまぬかれない．世阿弥はこれらを「時分の花」と呼んで，「咲くころあればやがて散る時分あり」といい，永つづきしないとみています．人気の永続を望む役者はこの段階にとどまることはできま

せん．当然心から出でくる花をもちたく思う．それは花は無常であり，無我であるという理(ことわり)を悟った心から，花の情(こころ)を悟った心から，出で来る花で，「咲く道理も散る道理も，こころのまま」と世阿弥が書いている通り，名人芸ともいうべきもので，「誠の花」とも，「天下に名望久しかるべし」ともいっています．このように見てくると，態から出で来る花は，花の理を悟った心に支えられ，包まれ，生かされるべきで，「花は心，種は態」というのは，このことを指しているのではないでしょうか．形なきものの形を見，声なきものの声を聞くことも，このようになれば，可能ではあるまいか，とわたしは考えてみました．こころの花は見えませんが，それが種に働きかけて，態として動き出せば，わたしたちは見ることができる，と思うのです．

ここまできて，花を「知る」という意味について，あらためて考え直すと，心で知るばかりでなく，身(からだ)でも知ることが無視できないように思うのです．「花は心」と同時に「種は態」も大事だと思います．道元禅師は「正法眼蔵身心学道」の巻に，「仏道を学習するに，しばらくふたつあり．いはゆる心をもて学し，身をもて学するなり．」「心をもて学するといふは，あらゆる諸心をもて学するなり．」「身学道といふは，身にて学道するなり，赤肉団の学道なり．身は学道よりきたり，学道よりきたれるは，ともに身なり．」といっています．ところで問題はこの二つがどんな結び付きをするかということですが，世阿弥は，「花」と「種」と，「心」と「態」との二組の関聯を示していますが，芸の上では「花」は見せるもの，「種」は見せるものではありません．「心」は見えぬもの，「態」は見えるものです．この四者のかねあいの論理については，いま思案中です．（よい知恵があったら，お知らせ下さい．）複雑でなかなかむつかしそうですが，それだけにまた，考え甲斐のある難問だと思います．

さて，世阿弥は「花の段」を前記の通り，禅宗六祖慧能の偈を以て結んでいます．

心地含諸種　　普雨悉皆萠
頓悟花情已　　菩提果自成
（心地に含んだ諸の種に，普く雨が降りそそいで悉く皆萠えでました．
頓に花の情（こころ）を悟り已ったら，菩提（さとり）の果（み）が自ずと成りました．）

世阿弥はこの偈で「花を知る」要諦を説示したつもりらしい．晩年の世阿弥は，花のこころを悟って到達する芸位を，安位・正位・証位などと呼んでいますから，三法印のうちの第三の法印，「涅槃寂静」の境位に相当します．花の比論のところで指摘した，「諸行無常」と「諸法無我」の二法印にこれを加えますと，三法印が揃います．

上の偈にでてくる「菩提」もさとり，法印の「涅槃」もさとりですが，前者は真理を悟って迷いから覚め，知慧の光で無明の闇を退治した結果，自ら仏たることを自覚することであり，後者は煩悩の火を消しとめた結果，仏そのものに成ることです．そういうわけで，花を「知る」は，「覚」であり，「成」であると思います．仏教では，一切衆生悉有仏性といって，人は仏性，すなわち仏に成る可能性をもっている，知慧の力で迷惑を去って，本性を自覚し，修行によって煩悩を消して，本来の自己たる仏に成る．能の世界でも同じで，能役者は本来花に成る可能性をもっていると考えれば，自分の本性は花であると自覚し，花に成るために，役者は稽古に努める．そう考えてくると，仏教でいう修行と，能の稽古とは同じ性質のような気がしてきます．

以上で，冥想第二日は終ります．次は「どうしたら花を知ることができるか」，という問題に移ることになりますが，仏教には「覚」と「成」とを目指して修行する道に，所謂八正道があります．正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定がそれですが，能にはこれに当るものがあるでしょうか．世阿弥は能の稽古の指針として，「花の公案」を考えていますが，どちらかといえば，仏教の三学，即ち戒・定・慧の教えに近いように，わたしは思います．「花の公案」で世阿弥がどんな考えを打ち出

すか，見ものであります．

（附記） 晩年の世阿弥が『遊楽習道風見』に，「器」の理論を提出しています．そして，「有無二道にとらば，有は見，無は器なり．有を現はす物は無なり」と書いています．芸位の究極を無（空）位と考え，そこからいろいろな芸が出てくるというのです．あたかも，天地（無）が四季の風物（有）を時節をたがえず，自在に現出するように，無位に到達した役者は，自由に，「意中の景（無）より曲色の見風（有）をなさん堪能の達人，これ器物なるべし」ともいっています．

ところで，「咲く道理も，散る道理も，心のまま」と，『花伝書』にも書いてありますから，花を知ることによって，自由の境地に到りうると，世阿弥は考えたらしい．

わかり易くいえば，菩提は明るく，涅槃は静かで，空とか無は自由自在だとすれば，花を知った後に来るものが，どんなものか，およそわかるような気がします．

花の公案

冥想第三日は，その年の秋もなかば，名月の夜にやって来ました．桜の梢に見えかくれする月の，明るい光が，縁側にすえた三方の上の団子や野菜を，冷たく照らしていました．わたしは廊下に座布団をもち出して，差し込む月光を半身に浴びながら，「どうしたら，花を知ることができるか」という問題についての考えを，まとめることにしました．

『花伝書』にいう「知」の何であるかは，すでに見てきました．比喩をもっていえば，他人の姿を観察するのではなく，自分の後姿を見得（けんとく）しようとするのだから，西洋風の学問のやり方では間に合わない．ではどうしたらいいか．やり方がないわけではなく，慣れないから，わかるまでは，とまどうのです．

世阿弥は『花伝書』の序の末尾のところに，こう記しています．

一，好色・博奕（ばくえき）・大酒，三重戒，これ古人の掟なり．

一，稽古は強かれ，諍識（じょうしき）はなかれとなり．

前者は女色におぼれ，ばくちにふけり，酒にひたれば，やがては自己を

見失うから，気をつけよといい，後者は下手な自我は捨て去って，謙虚に稽古に努めよと説いているのです．一方では本当の自分を失うなといい，他方ではくだらない我執は棄てよという，要するに，稽古修行の前提に，心操を調え，自分をうまく調節してかかれといっているので，悪いわらじで旅立つと，やがて歩行に難儀すると警告しているのです．道元が『学道用心集』に「発心正しからざれば，万行空しく施す」といっているのに当ります．仏教でいう三学，すなわち戒・定・慧のうちの戒に当ります．仏教でいう三学の「学」は，西洋風の学とは異り，「修」の意味です．修は自分の後姿を見得するのがねらいですから，当然三学の行程は，自戒でスタートし，全行程をこれでつらぬきます．

三学すなわち「修」の第二段階には，定と慧とが並行して，手をつないでやって来ます．仲のよい鳩の夫婦のように，いつも番（つがい）であらわれます．定は気を散らさずに自分のやろうと思ったことに専心することで，慧は般若（空）の知恵ともいわれて，自分のこころの鏡に映る自分の姿を見る眼を養うことですから，定と慧とがいつも二人連れで，離れられない理由（わけ）が，わかるような気がします．一口にいえば自己の究明で，それが修です．

世阿弥は，このようなことは承知の上で，「花の段」に，稽古の順序次第を次のように説いています．物ごころがつくかつかぬ年少の時から稽古をはじめ，能役者になるためには生涯をこの道に打ち込んで，定められた数々の習いごとを，定められた順序にしたがって，くりかえしくりかえし，極めつくし，強い稽古を重ね，その稽古を重ねる間に，さまざまに工夫公案をして，そうしてはじめて，花の失せぬところ，すなわち「咲く道理も，散る道理も，こころのままに」なるような境地に到達するのだ，と世阿弥は説いています．物数（豊富なレパートリー）を尽して花の種ともいうべき態を身につけ，その際にさまざまに工夫公案を極めて花の理を心に悟る，「花は心，種は態」という命題は，このことを指しているのです．この命題のねらいは，一口にいえば，どうしたら「珍しき」能を演じうる

かという一事にかかっています.「花と，面白きと，珍しきと，これ三つは，同じ心なり」という第一の命題に対して，わたしは「花は心，種は態」を第二の命題と呼んでいます．世阿弥はこの第一と第二の命題の真意を，次のように懇切丁寧に説いています.

ただし，様あり．珍しきといへばとて，世なき風体をし出だすにはあるべからず．花伝に出だす所の条々を悉く稽古し終りて，さて，申楽をせん時に，その物数を用々に従ひて，取り出だすべし．花と申すも，万の草木において，いづれか，四季（折節）の，時の花の外に，珍しき花のあるべき．その如くに，習ひ覚えつる品々を極めぬれば，時・折節の当世を心得て，時の好みの品によりて，その風体を取り出だす．これ，時の花の咲くを見んが如し．花と申すも，去年咲きし種なり．能も，もと見し風体なれども，物数を極めぬれば，その数を尽すほど久しし．久しくて見れば，また珍しきなり.

その上，人の好みも色々にして，音曲・振舞・物まね，所々に変りて，とりどりなれば，いづれの風体をも，残しては叶ふまじきなり．しかれば，物数を極め尽したらん為手は，初春の梅より秋の菊の花の咲き果つるまで，一年中の花の種を持ちたらんが如し．いづれの花なりとも，人の望み，時によりて，取り出だすべし．物数を極めずば，時によりて，花を失ふことあるべし．喩へば，春の花の比(ころ)過ぎて，夏草の花を賞翫せんずる時分に，春の花の風体ばかりを得たらん為手が，夏草の花はなくて，過ぎし春の花をまた持ちて出でたらんは，時の花に合ふべしや．これにて知るべし．ただ，花は見る人の心に珍しきが花なり．しかれば，花伝の花の段に，「物数を極めて，工夫を尽して後，花の失せぬ所を知るべし，」とあるは，この口伝なり．されば，花とて別にはなきものなり．物数を尽して，工夫を得て，珍しき感を心得るが花なり.「花は心，種は態」と書けるも，これなり.

第七別紙口伝には，珍しき花の理をわれと知るための稽古の指針ともいうべき公案が，十則ばかり列挙されています．わたしは「珍しき花の公案」と呼んでいます.

一，鬼を珍しく為(し)いだすための公案
二，老人を珍しく為いだすための公案
三，音曲・舞・働き・振り・風情を，常よりもなお面白く（珍しく）する工夫
四，十体の花の公案

五，年々去来の花の公案
六，舞・働き・物まね，あらゆる事に住せぬ理を知る工夫
七，秘する花の公案
八，因果の花の公案
九，時に用い，用足るを花と知る公案
十，花とて別にはなく，よろずに珍しき理をわれと知る公案

『花伝書』には，「公案」という語が随所にでてきます．時には「工夫」ともいい，また「工夫公案」ともいっています．そして，数え方によっては，『花伝書』七篇中には，二十も三十も数え挙げることができます．いずれも，公案中には，先人たちの苦心の跡，後進への深切な配慮，稽古修行する者にとってありがたい指針がふくまれています．これらは，見方によっては，なにも能の世界にのみ通用するものではなく，現代のわたしたちの日常生活にそのまま応用できるものを含んでいます．以下，実例のいくつかをとりあげてみます．できるだけわかり易く書いてみます．

常よりもなお面白く（珍しく）する工夫　これは音曲・舞・働き・振り・風情などにかかわりのある公案です．これらについて珍しき感を見聞く人に与える手立，これがこの公案のねらいです．例えば，音曲についていえば，「節は定まれる形木(型)」ですが，曲となると，「上手のもの」でなければ演(や)れません．舞でいえば，手は「習へる形木」ですが，品となると，「上手のもの」でなければ出せません．音曲でも，舞でも，これらの形木(型)の段階では，まだ，面白味（珍しさ）というものは出て来ません．珍しき感は「形木」を超えたところに生れるものです．

音曲でも，舞でも，働きでも，振りでも，風情でも，所謂「型」を学ぶ段階では，まだ，面白さが生れないのは当然です．しかし，「型」は大事で，これをしっかり身につけなければなりません．「型」を出るにしても，まず，しっかり「型」に入らなければ，正しい意味で「型」を超えることになりません．珍しさ，面白さを生み出すのは，その上での話でありま

す.

さて，その「型」を身につけた上で，見聞く人びとが，いつもの調子だと思っている所を，「さのみに住せずして，心根に，同じ振りながら，元よりは，軽々と，風体を嗜み，いつもの音曲なれども，なほ，故実を廻らして，曲を彩り，声色を嗜みて，」自分自身でも，今までにないほど，熱をいれて，大事にして，演ずれば，見る人，聞く人から，いつもより今日は大層面白い，という賞讃のことばのでることがあります．これこそ，まさに，「見聞く人のため，珍しき心にあらずや」ということになります．

上手が演(や)ると面白いのは，このようなわけですが，しかし，同じ上手のうちでも，無上の公案を極めた芸人が演ると，その上にも特別の面白さが生れて来ます．珍しさ，面白さの生れる源は，以上のようなところにあることを知るべきであります．

十体を心得べき事　十体とは，物まねのあらゆる風体をいう．したがって，十体を心得べしとは，「花の種」「能数」を多く持てということであります．持駒が多ければ，必要に応じて，心の工夫次第で，いつ，どこでも，たれにも，ふさわしい芸を演じて見せることができます．この公案は，能の命の長久を願い，名望を失わぬためには，無視できないものであります．

「珍しき理」という点から見ると，十体を心得ている芸人は，同じことを繰り返すにしても，その一廻りは，長もちするから，人気も永続きします．しかも，その上に，故実を知り，工夫を極めると，十体を倍して，百色にも活用できる．これは確かに安定性をもつわけです．五年・三年の中に一度の割で，為替えるように割り当てることもでき，一年のうちでも，四季に応じた芸もできるし，更に短かく，数日の演能にも，また一日の中にも，色々と変った風体を為替えて，彩りをもたせることもできます．演能の場所でも，晴れの大舞台，地方の小舞台，それぞれにふさわしい能を，自ずと無理なく演じわけることができるわけで，生涯を通じて，花を

失うことなしにすごすことができます.

年々去来の花を忘れぬ事　十体は横に，年々去来の花は縦に，並べることができます．十体は物まねの品々です．第二物学条々には，女・老人・直面・物狂・法師・修羅・神・鬼・唐事を挙げていますが，後に「二曲三体」の考えができると，老・女・軍三体を基本風とみて，これを基にたくさんの応用風を生むという考えに進んでいます．これらの風体を横に並べるとすれば，年々去来の風体とは，初心・壮年・老年と一生を貫いて，それぞれの時期に身に即く風体をいうのであるから，一応縦に列ねてみますと，「時分々々の，おのれと身にありし風体を，当芸に一度に持つ事」をねらいとするらしく，縦に列ねた風体を，現在の自分の芸として，一身に集めて持てという，ずい分欲ばった公案であります．だから，「ある時は児若族の能かと見え，ある時は年盛りの為手かと覚え，または，いかほども藹たけて，劫入りたるやうに見えて，同じ主とも見えぬやうに能をする」ことが理想とされています．「これ即ち，幼少の時より老後までの芸を一度に持つ理なり」というわけで，これを，年々去来の花を忘るべからずという公案と呼ぶのです．

世阿弥はいう，年々去来の花を一身に一度に持った理想の芸人は，昔も今も，見聞したことはない，しかし，ただ一人，亡父観阿弥は例外で，若盛りの能に劫入りたる風が見え，壮年の能に十七，八の人体が見られた，「かやうに，若き時分には，行末の年々去来の風体を得，年寄りては，過ぎしかたの風体を身に残す」ような優れた芸人は，亡父以外には二人となかったようであると．

この公案のねらいも，「珍しき」ということにあるので，「若くて年寄りの風体，年寄りては盛りの風体を残す事」は，まさに，珍しきというべきでありましょう．ところが，世の芸人を見ると，位が上ると，以前の風体を忘れるのが普通で，これでは前に仕入れた折角の花の種を失うことになります．現に持つ花だけで，前後の花種を持たない為手の芸は，「手折れ

る枝の花」の如きものであります．種さえあれば，いつかはまた時に会うことは必定です．十体を工夫で百色に彩り，年々去来の品々を一身当芸に加えたならば，どれほどの花を持つことになろうか，すばらしいといわざるを得ません．

秘する花を知る公案　諸道芸において，家々に秘事というものがあって，秘して他に知らせぬところに大きな効用を発揮すると考えられていました．しかし，秘事というものも，露顕してしまえば，内容は大したものではありませんが，それだからといって，一概に秘事をくだらぬもの，無用のものと斥けるのは，まだ，秘事の効用を正しく理解していないからであります．

能の世界でいえば，珍しきが花であるという口伝があると知って，さては何か珍しき事があるに違いないと，待ち設けている見物衆の前では，たとい珍しき事を演じても，見物の心に珍しき感を興させることはできません．これは芸人にとっては，生命にも代え難い一大事であります．見物衆は花とも知らないでこそ，役者には花となるのです．「されば，見る人は，ただ思ひの外に面白き上手とばかり見て，これは花ぞとも知らぬが，為手の花なり．」そういうわけで，「人の心に思ひも寄らぬ感を催す手立．」これが秘せる花の公案のねらいです．

弓矢の道に例をとれば，役者と見物とは，敵同志のようなものです．相手方の思いもよらぬ手立を用いて，強敵に勝つこともある．相手は「珍しき理に化かされて，」敗けたのです．「これ一切の事，諸道芸において，勝負に勝つ理なり．」しかし，このような手立も，勝負がついて，計り事が判明して見れば，大した事でなくても，敵は知らなかったばかりに負けたのです．

ですから，芸道の家にも，秘事というものを何か一つ遺す必要があります．秘事の心理を分析すると，次のようになります．「かかる秘事を知れる人ぞとも，人には知られまじきなり．」知られれば，敵は油断せず用

心する，用心すれば，敵に気付かれてしまう．敵が用心しなければ，こっちが容易に勝つことができる．そういうわけで，人に油断をさせて勝つことを得るは，「珍しき理の大用なるにてはあらずや．」秘事のねらいはここにあり，というわけです．生涯を能の主として花をもちつゞけるためには，秘事は欠くことはできません．「秘すれば花，秘せざれば花なるべからず」の公案の真義はここにあり，です．

因果の花を知る公案　一切，みな因果なり，と世阿弥は書いています．例えば，初心より習い覚えた芸能の数々は因で，名声を得ることは果であります．稽古の因がおろそかだと，名声の果をうることはできません．時運（うつり変り）にも因果があります．去年よければ，今年はわるい，これが因果の理だ，と世阿弥はいいます．時というものにも因果がある．男時・女時がそれで，運の付きの有無をいうらしい．能にも，出来のよい時と，どうしても不出来の時があります．「力なき因果」というのがそれで，人力では如何ともできぬ理法だと世阿弥はいっています．

このように見てきますと，努力次第で左右しうる因果と，人力では動かし難い因果との二種あるようにうけとれます．稽古の善悪強弱による名声の得不得の分れ目は，前の場合で，男時・女時の廻り合せによる，能の出来不出来は，後の場合です．世阿弥がここで問題にしているのは，後者の場合で，その要領は，力なき因果の理には逆らわず，むしろ，この理の上にのって，この理のもつ「珍しき大用」，すなわち，大きな効用性を利用すべきである，といっています．

因果の花を知る要領は，力なき因果の理を，まずすなおに受け入れて，例えば，それほど大事でない時の能には，立合勝負にも，あまり我意を張らず，極く自然に，勝ち負けなどは気にせずに，力を出し切らないように心がけ，ひかえ目な能をする，そうすると，見物衆は，どうしたことかと，やや興さめた気分でいる所に，大事な申楽の日が来た時，手立を変え，最も得意とする能を，精出して演じると，見物は，これはまた，急の

変化に意外のことと驚いて，大事な立会勝負に，勝利をうること必定であります．これまさに，「珍しき大用」であり，前に悪かった因果で，後が好転したのです．

そういうわけで，力なき因果の花を知るというのは，因果の理を心得て逆らわず，これに随順することによって，効果を挙げることにほかなりません．しかし，それは，運のむいて来るまで，手をこまねいて居れ，というのではなく，むしろ，張りたがる我意を静め，動きたがる身を押え，冷静な眼で，好転の機会を待つ，現実直視の強気の姿であると，見るべきでしょう．

世阿弥はさらに，男時・女時を例にとって立会勝負の要領を説いています．勝神と負神との二柱の神が，交互に，敵と味方とに移り変るのであるから，もし，「敵方の申楽よく出で来らば，勝神彼方にましますと心得て，先づ，恐れをなすべし」と書いています．しかし，実際には，そうとわかっていても，なかなかそれは出来ないことです．心から恐れをなす人は，強くて実力に自信があって冷静な人であるにちがいない．そうして，やがて，「また，我が方の時分になると思はん時，頼みたる能をすべし．」所謂満を持していて，勝神がこっちに来たら，思い切って得意な能を演じて，勝負を一気に決すべし，というのです．この公案には，世阿弥は，よほどの自信があるとみえて，「返す返す，おろそかに思うべからず，信あらば徳あるべし」という言葉で結んでいます．

時に用ゆるを以て花と知る公案　因果の道理を思案してみると，要するに，よき時あしき時のあるのも，ただ，珍しきと珍しからぬの二つにほかならないことがわかります．例えば，同じ上手が，同じ能を演って，昨日は面白かったのに，今日は面白くないのは，昨日は珍しいので面白く感じ，今日はもはや珍しくないので面白いと思わぬのであります．したがって，能の出来のよしあしは，結局珍しきと珍しからぬによって定まるので，能自体のよしあしではかならずしもないことを知らねばなりません．

ですから,「この道を極め終りて見れば，花とて別にはなきものなり．奥儀を極めて，よろづに珍しき理を花と知るならでは，花はあるべからず」と世阿弥は書いています．さらに，維摩経入不二法門品の「善悪不二，邪正一如」という語を引用して，よしあしというのも，何によって定まるかというと，時により用足るものがよく，用足らぬものがあし，ということになる．したがって，「時に用ゆるをもて，花と知るべし」というのが，この公案の眼目だ，と書いています．

わたしの冥想も長時間にわたりました．気がつくと，月は中天に冴えわたって，庭は月明りに昼のようです．夜もだいぶふけました．冷気が感じられます．もう，やすむことにいたします．

結　　び

以上でこの文章を終ります．したがって，以下は蛇足です．

三週間前，わたしは腸閉塞で手術をしました．癒着性のものでした．大手術でしたが，輸血もせず，手術後どんどんよくなって，いまは，腹部に縦二十センチほどの傷跡を残すのみで，もっぱら保養と体力作りにつとめています．

昨十月十日は体育の日で，各地に諸行事がありました．空は近ごろの東京には珍しく，抜けるような青さでした．ところが，今日十一日は夜来の雨が一日中降りつづいています．わたしはいま，静かな午後のひととき，桜の木の下にある庭小屋の書斉で，仏教の原始経典テーラ・ガータ The Thera-gāthā（長老の詩）を読んでいます．その第六章に，マツラ族の出身で，かつてカピラヴィッツ城に使したとき，一緒に出家したという仲のよい三人の長老の唱和する詩がでています．

ゴーディカ長老

麗わしい旋律をかなでるように，雨が降る．
わたしの小屋は，よく葺かれ，風を防いで，楽しい．
そして，わたしの心はよく安定している．
さあ，雨よ，もしも〔降らそうと〕思えば，降るがよい．

スパーフ長老

麗わしい旋律をかなでるように，雨が降る．
わたしの小屋は，よく葺かれ，風を防いで，楽しい．
しかも，その上に，心は身体〔の観察〕によって，よく安定している．
さあ，雨よ，もしも〔降らそうと〕思えば，降るがよい．

ヴァッリヤ長老

麗わしい旋律をかなでるように，雨が降る．
わたしの小屋は，よく葺かれ，風を防いで，楽しい．
わたしは，そのなかに侶(とも)なく独りで住んでいる．
さあ，雨よ，もしも〔降らそうと〕思えば，降るがよい．

この詩は，病気回復期のわたしには，こころよいなぐさめです．三木清は『人生論ノート』の中で，回復期の健康感は不安定だといっていますが，いまのわたしはそれは感じません．静かな落ちついた安定感があります．むしろ，病気になる以前には知らなかった，充実した生命感の，あかるいよろこびにひたっています．

終戦直後，わたしたち日本人が一様に虚脱状態にあったとき，焼跡の瓦礫の上を流れてきたリンゴの唄，「リンゴはなんにも知らないけれど，リンゴの気持はよくわかる，リンゴかわいや，かわいやリンゴ」このメロディを聞いて，日本人はなぐさめられ，他人(ひと)を信用する気にもなり，立ち上りました．これが「花」です．世阿弥は芸能の効用を説いて，第五奥儀讃歎云に，「そもそも，芸能とは諸人の心をやわらげて，上下の感をなさん

事，寿福増長の基，遐令延年の法なるべし．極め極めては，諸道悉く，寿福増長ならん」といっています．

謡曲の多くは，人の世の苦悩を主題にしています．主人公の苦悩は，一曲を貫ぬく仏教的哀感に融け，全曲を包む慈愛の情感に和らげられ，見物衆のこころに，なぐさめと，おちつきを与えるかに見えます．能楽の象徴美は人びとを夢幻の境に誘って，慰藉するのでしょうか．昔はよく観能しましたけれど，近ごろはぶさたをしています．からだがよくなったら，久しぶりに出かけようかと思っています．

今日は退院後十二日目に当ります．まだ明るいうちに，風呂をわかしてもらって，はいりました．思い切りシャボンの泡をたてて，傷の上に流してみました．

麗わしい旋律をかなでるように，雨が降る．
わたしの小屋は，よく葺かれ，風を防いで，楽しい．

わたしの身体（からだ）の傷も，心の傷も，ともに流れ去ろうとしている．
さあ，雨よ，もしも〔降らそうと〕思えば，降るがよい．

わたしは，古代インドの長老たちにこのように唱和しました．

(1972・10・11)

The Logic of the Noh-flower

Kazuyoshi Makayama

Résumé

The present thesis has two questions. The one is 'What is the Noh-flower?' and the other is 'What to do to know it?' The answer of the first question is the analogy, or psychological and logical resemblance between the real- and the noh-flower. The psychological proposition, here, is that the flower, novelty and interest are all the same, and the logical ones are that both the real- and the Noh-flower are transient, and are not permanent existence.

The answer of the second question is the methodology of knowing the Noh-flower. There are two problems here. The first is that what is it to know the Noh-flower and then the second is what to do to know it.

To know the Noh-flower is to know oneself and to become the flower itself, because the actor is born with the potentiality to become the flower.

This is the answer to the first question. To exercise heavily and earnestly, according to the "catechism of the Noh-flower" for meditation and practice, there are introduced ten catechetic questions and answers of the Noh-flower.

The above mentioned articles are what I have been reading and learning in Zeami's 'Kwadensho' for forty-five years since 1929.